

Catuhstava 注釈書について

津 田 明 雅

筆者は現在、東京大学総合図書館所蔵の *Catuhstava* (CS と略) 注釈書の写本の校訂を行っている¹⁾。CS は *Lokāṭīstava* (*Ls*)、*Niraupamyastava* (*Ns*)、*Acintyastava* (*As*)、*Paramārthastava* (*Ps*) という Nāgārjuna 作の4つの讃歌から構成される。サンスクリットは複数の写本が存在し、チベット訳はCSとしてではなく個々の讃歌ごとに存在する。漢訳はない。筆者が校訂中のものはこのCSに対する注釈書で、テキストとしてはこのサンスクリット写本一本しか存在しない。本稿では、まずCS写本一般の情報の整理を行い、次いで本写本の情報をまとめる。

CSのサンスクリット写本 CSはこれまでに Tucci²⁾ (*Ns* と *Ps* のみ) と Lindtner³⁾ (*Ls* と *As* 及び Tucci (1932) への訂正表) によって校訂がなされた。また、最近 Namdol⁴⁾ によって前二者が用いなかった写本を使用した校訂本も出版された。CSのサンスクリット写本についてまとめると、

〈4つの讃歌のそろったもの〉 T⁵⁾, W⁶⁾, M⁷⁾, G⁸⁾, Ka⁹⁾, Kha¹⁰⁾, CSS¹¹⁾。

〈単独の讃歌のもの〉 DhI¹²⁾, DhII¹³⁾, DhIII¹⁴⁾, DhIV¹⁵⁾, DhV¹⁶⁾。

〈不明のもの〉 Tucci (1932) の写本

これらのうち、最も読みが正確で信頼のおけるものは T. Lindtner (1982) でもほぼ T の読みが採用されている。T は偈頌に並べて注釈が書かれており、偈頌と注釈中で二度テキストの読みが確認できる上、注釈自体も逐語的で、偈中の語の他の語への置き換えや文法的説明で構成されていて、テキストの読みを確認する場合に非常に有益である。すでに筆者はこの注釈から得られた新たな読みのうち重要なものをいくつか発表した¹⁷⁾。W はまれにいい読みがあるものの単純な書き誤りなどが多い。M と G は Lindtner の個人蔵で、また Ka と Kha は資料を確認できなかったため、これら4本は筆者未見。いずれも正確には写本そのものではない。ただし、M と G に関しては Lindtner (1982) の校訂を見る限り読みとしてはあまりいいものがなく、Ka と Kha に関しては Namdol (2001) を見る限り次の DhI ~ DhV に共通した読みがみられる。CSS は CS の注釈であるが、CS 本文の引用はほとん

どなく、校訂に際してはあまり役に立たない。

Ls に関しては単独のものが、新たに見つかった DhIII を含めて計 5 本存在するが、それらはいずれもいわゆる “Dhāraṇī-saṃgraha”¹⁸⁾ に収められたものである。DhI は 5 つの中で最も綴り字の誤りが少ないのに対し、DhIII は誤りが多くほぼ全ての単語を訂正する必要がある。次いで DhII と DhV にも誤りが多い。DhIV は比較的少ない。読みの傾向は DhI, DhIV, DhV の 3 本と DhII, DhIII の 2 本との 2 つで異なる。DhII と DhIII は *Ls* 前後の作品構成も共通している。DhI ~ DhV のいずれも、T とは異なる読みをいくつかもつ。

最後に挙げた Tucci の写本は *Ns* と *Ps* のみのものであるが、もともと 4 つの揃った CS としての写本であったのか、讃歌ごとに別々の写本なのか、写本の作品構成がよく分からない。氏のわずかな記述¹⁹⁾ から類推すれば、T のようなもの、あるいは T と同一テキストで、他の 2 讃歌の部分が散逸したもの、という可能性も考えられる。実際、このテキストは T の読みとよく一致する。

東大写本について 本注釈書 (T) が含まれる写本は 3 つの作品から構成されており、それで 1 つの写本の束となっている。紙もインクも同一のものが使われていることから、3 作品が同時に筆写されたものと考えられる。

〈写本の束の構成〉(作品名、著者名、フォリオ、字体)

- I. *Akāṛīṭikā* of *Catuḥstava*, Śiromaṇi, 1a-36a, Newārī.
- II. *Mekhalāṭikā* of *Dohakoṣa*, Kṛṣṇācārya, 36b-45b, Bengali.
- III. *Adhyātmāsārasataka*, Prabhākara Gupta, 1a-16a, Newārī.

(注) フォリオ 36 番は、表は Newārī 裏は Bengali と、表裏で字体が異なっている。

〈奥書きの情報〉

III の後の奥書きには Saṃvat 612 (16a7), Saṃvat 693 (16b1) と 2 つの年代がみられるが、それらが何の年代かは不明。

I の冒頭と最後と III の後の奥書きには共通するいくつかの固有名詞がみられる。‘Samyak-sad-ācārya-Śiromaṇi’ (36a6) および ‘Rūparāja’ (36a7) は、‘Ācārya-paṇḍita-śrī-Śiromaṇi’ (16a3) および ‘Vajrācārya-śrī-Rūparāja’ (16a4) と同じ二人の組み合わせだと考えられる。同様に、‘Śrī-maṇisaṃgha-mahāvihāra’ (1a1) と ‘Maṇisaṃgha-vihāra’ (16a3) も同一のものだと考えられる。

これら 3 つの固有名詞のうち Śiromaṇi は *Akāṛīṭikā* の注釈者である。人物の詳細は不明だが、奥書きからマガダで、後にネパールで²⁰⁾ この注釈を書いたことが分かる。また、この写本に見られる年代 Saṃvat 612 (=1492) の人物に Raghunātha Śi-

romaṇi (ca. 1475-1550)²¹⁾ がいる。彼は新ニヤーヤ学派の巨匠で、直ちに中観派と結びつくとは思えないが、この注釈書の内容が特定の学派に限定されない、学校の教材レベルのものであることを考慮すると、強く否定する理由もない。マガダからネパールにかけては彼の活動範囲とも重なる。注釈書の中に彼の思想と共通する点があるかどうか等の検討は今後の課題である。Rūparāja に関しては ‘likhita’ (36a7) と ‘lekhitā’ (16a4) の解釈が問題となる。前者の場合「[Rūparāja によって] 筆写された」となるが、後者では「筆写させられた」と使役の意味が加わってくる。つまり、どちらの読みをとるかで彼が筆写者本人であるか、筆写を命じた施主であるか分かれる。肩書きの ‘Vajrācārya’ (16a4)²²⁾ という、僧院の僧侶という身分を考慮すると、施主というよりはむしろ筆写者とみるほうが妥当であろう²³⁾。彼は ‘Kāntipura’ (36a7) つまり Kathmandu²⁴⁾ に住む。Maṇisaṃgha-mahāvihāra は Kathmandu の主要な僧院の1つ²⁵⁾。奥書きの人物との関係は不明。

また、I の奥書きと III の後の奥書きに重複した記述があることには注意を要する。III の後ろには「Śiromaṇi によって作られた注釈 (vyākhyāna)」(16a3) という記述があるが、それが指すものは I の *Akāṛīṭikā* をおいて他にない。というのも II は注釈書であるが著者は Kṛṣṇācārya であり、III は注釈書ではない。したがって III の後の記述は I の奥書きであることが分かる。写本の束の最後に再び I の奥書きがあることから、この写本の束の中心は I で、II, III はそれに添えられたものだと考えられる。中観の文献である I になぜ密教文献である II, III が添えられたのか、それには、筆写者が「金剛乗の僧」(Vajrācārya) であること、さらには筆写当時のネパールでの密教の隆盛が影響していると考えられる。

まとめ *Akāṛīṭikā* の奥書きの情報を整理すると、年代は Samvat 612 と 693、注釈者は Śiromaṇi (Magadha, 後に Nepal で本書を著作)、筆写者は Rūparāja (Kathmandu 在住, Vajrācārya)。また *Ls* 写本に関して、新たに DhIII が見つかった。

本注釈書は未だ解明されるべき点を、特に奥書きにおいて多く残しているが、注釈自体は CS 研究に欠かせない重要なものである。特にテキストの読みに関して貴重な示唆を与え、また類語辞典としての機能も併せもっている。注釈者 Śiromaṇi の特定ができれば、本書の価値をさらに絞り込めるだろう。

1) 校訂にあたっては種智院大学の野口圭也先生にご指導頂いた。貴重な時間を割いての多くのご教示に感謝し、お礼申し上げます。 2) G. Tucci (1932) “Two hymns of the Catuḥstava of Nāgārjuna”, *Journal of the Royal Asiatic Society*, 2-April, pp. 309-325. 3) Chr.

(110)

Catuhstava 注釈書について (津 田)

- Lindtner (1982) *Nagarjuniana*, Copenhagen. 4) G. Namdol (2001) *Catuhstavah of Nā-gārjuna*, Bibliotheca Indo-Tibetica Series, 50, Varanasi. 5) S. Matsunami (1965) *A Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the Tokyo University Library*, Tokyo, New No. 340-1. 6) Microfiche Edition, The Institute for Advanced Studies of World Religions (IASWR), New York, MBB-I-93. Lindtner (1982), p. 124.9-10. 7) *id.*, pp. 123.18-21. 8) *id.*, pp. 123.22-124.3. 9) Namdol (2001), III p.90.14-17. *Akhila Nepāla Mahāyānabuddhasamāja*, edited by Nepal Pandit, Divyavajra Vajrācārya, Kathmandu. It is the edition of CS with a Nepalese translation and a summary of each stava. 10) *id.*, III p. 90.18-29. *Bauddhastotra-saṃgraha*, edited by Pandit, Janārdana Śāstrī Pāṇḍeya, Vārāṇasī. It is an edition of 108 stavas, which contains the 4 stavas of CS, but not as CS. 11) G. Tucci (1956) “Catuhstavasamāsārtha of Amṛtākara”, *Minor Buddhist Texts*, 1, Roma, pp. 234-246. 12) *Ls* 写本, “Dhāraṇīs” に含まれる. Matsunami (1965), New No. 419-III-152. 塚本啓祥他 (1990) 『梵語仏典の研究 III』, 京都, p. 140.10-11. 13) *Śrī-Lokātītastava-nāma-stotra (=Ls)* 写本, “Dhāraṇīs and Stotras” に含まれる. Matsunami (1965), New No. 420-XI-5. 『梵語仏典の研究 III』 p. 140.12-14. 14) *Śrī-Lokātītastava-nāma-stotra (=Ls)* 写本, *Dhāraṇīsaṃgraha-purāṇamahāyānasūtra-ratnarāja* に含まれる. IASWR, MBB-II-171-74, folios 237b4-240a1. Date : Samvat 905 (282a1). Character : Navārī. MBB-II-171 はフォリオ数 282, 108 作品を含む. 15) *Ls* 写本, “Dhāraṇīsaṃgraha” に含まれる. J. Filliozat (1941) *Catalogue du Fonds Sanscrit*, 1, Paris, No. 62-46. 16) *Ls* 写本, “Dhāraṇī collection” に含まれる. R. Kaneko etc. (1979) “A Descriptive Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the Possession of the Toyo Bunko”, *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*, 37, pp. 159-191, No. 13-130. 17) 拙稿 (2002) 「*Catuhstava* テキストの再検討—注釈書を利用して—」, 『仏教史学研究』, 44-2, pp. 1-26. 18) “Dhāraṇīsaṃgraha” には未解明な点が多い. 塚本啓祥他 (1989) 『梵語仏典の研究 IV』, 京都, pp. 61-62. ここに報告されている “Dhāraṇīsaṃgraha” 写本のうち IASWR の 6 写本を確認した結果, MBB-II-171 (p. 62.8 の-71 は-171 の誤り) のみに *Ls* が含まれることが分かった. この調査は加納和雄氏 (京都大学大学院) の助言なしにはありえなかった. また DhV の情報も提供頂いた. お礼申し上げます. 19) Tucci (1932), p. 311.12-15. 20) ‘magadha-deśe ’nāgataṃ naipāla-maṇḍalake’ (16a2-3) 21) D. H. H. Ingalls (1951) *Materials for the Study of Navya-Nyāya Logic*, Harvard Oriental Series, 40, Cambridge, Massachusetts, pp. 9.6-20.3. 22) 田中公明他 (1998) 『ネパール仏教』, 東京, pp. 5.12-6.2. 23) 拙稿 (2002), p. 9.8: 「筆写を命じたのは」を「筆写者は」と訂正する. 24) 三枝礼子 (1997) 『ネパール語辞典』, 東京, p. 129 left 31-32. 25) J. K. Locke (1985) *Buddhist Monasteries of Nepal*, Kathmandu, p. 250.27.

〈キーワード〉 Nāgārjuna, *Catuhstava*, Śīromaṇi, Dhāraṇīsaṃgraha, ネパール写本

(京都大学大学院博士課程修了)